

小説家デビュー

1年目の教科書



額賀滯



小説家として

業界を生き残る

ための

仕事術!

小説家になりたい & 小説家になったばかりの方、必読!



小説家デビュー1年目の教科書

額賀滯

星海社

355



SEIKAISHA  
SHINSHO



まえがき  
小説家デビューした直後のあなたへ

「本が売れない」

「出版業界は苦しい」

「なんとか本が売れないものか」

そんな言葉が出版業界の人間の鳴き声のようになっていくせいそう幾星霜。小説家が小説で食べていく難易度は、悲しいことに年々高くなっています。

それでも小説家を志す人の数は減らず、むしろ増えています。各出版社が主催する新人賞への応募数が増えているのふくがいい例です。新人賞だけでなく、ウェブ小説からの書籍化を含めれば、小説家デビューするルート自体は確実に増えているのです。

紙の書籍を出版して小説家デビューする人間は年々増加しているのに、念願の小説家デビューを勝ち取っても、小説家として生き続けられるかどうかは全くの別問題。新人作家

が5年、10年と生き残っていくのは、本当に難しい。

この「難しい」の大きな原因として、デビューしたてで右も左もわからない状態で、大御所や超売れっ子と横一線で並ばされ、「よいい、ドン！ 頑張つて生き残ってくださいー」とサバイバルレースが始まってしまふという点があると私は思っています。いや、私だけでなく、多くの小説家がそう思っているはずですよ。

デビューさせてくれた出版社が「小説家の生き残り方」を丁寧に教えてくれることもなく、研修もなければマニュアルもない。あつたとしても、それが全員に当てはまるわけではない。究極の「とりあえずやってみろ」と「体で覚えろ」の世界なのです。

かくいう私も、2015年に第22回松本清張賞まつもとせいちょうしょうと第16回小学館文庫小説賞を受賞し、夢だった小説家デビューを果たしました。例に漏れずサバイバルレースに放り込まれ、2025年現在、運よく（本当に運よく）作家生活10周年を迎えました。

この10年を振り返ってみると、後悔こうかいしていることや「こんなはずでは……」と思うことがたくさんあります。自分以外の作家を見て「こうすればよかったのか」と思うことも、もちろんあります。この記憶きおくを持ったまま2015年のデビュー当時にタイムリプできたら、間違いなくもっといい作家人生を歩めた！ と本気で思っています。

令和の出版業界、新人作家が「とりあえずやってみろ」で生き抜くには、あまりにも修羅の世界じゃないか？

10年小説家をやってみて、つくづくそう思います。この間に、何人の新人作家がデビューし、いつの間にか名前を聞かなくなったことか。

でもどうやったって2015年にタイムリープはできないので、私がデビュー1年目の自分に伝えたいことを、ここに本として綴つづっていいこうと思います。

なお、この本はあくまで「小説家デビューした人間が、どうやって出版業界をサバイブしていくか」ということをまとめたものです。「面白い小説の書き方」「小説家になる方法」「こうすれば新人賞を受賞できる!」といったノウハウは一切割愛して突き進みます。

でも、デビューを目指す作家志望の方々が「小説家になりたいわけじゃないけど小説家の仕事がどんなものなのか気になる」という方にとっても面白い読書になるよう、尽力しようと思います。

\*

さて、小説家デビュー1年目の額賀滯ぬかが みおさんへ。

2015年、あなたは夢だった小説家デビューを果たした直後だと思います。おめでとう、よく頑張りました。

それからおよそ10年がたった2025年も、あなたは運よく小説家を続けています。

この10年を振り返ってみると、「あのとき〇〇しておけば」ということがたくさんあります。その多くはデビュー1年目に起こりました。もしくは、デビュー1年目にちゃんと理解しておけば起こらなかったはずのものです。

この本は、タイムスリップできたらあなたに伝えたい『小説家デビュー1年目の教科書』です。運よく読めたら読んでください。

しかし、そんな奇跡がそう簡単に起こると思えないので、これを読んでいるあなたが「額賀滯ではないけれど、デビューしたばかりの新人作家です」というケースの方が多くかと思えます。

この本には、もしかしたら今後の仕事に何らかの形で役立つことが書いてあるかもしれないです。ただ一つご注意いただきたいのは、小説家という仕事は「誰かにとっての正しい方法が自分にも当てはまるとは限らない」ことがよくあるという点です。

例えば、私は松本清張賞と小学館文庫小説賞という、いわゆる「一般文芸」の小説の新人賞を受賞し、デビューしました。その中でも私はエンタメ分野の小説家です。

小説の市場やジャンル、小説家デビューの方法は多岐にわたります。ジャンルが違えば活動する上での慣習が違う。取引をする出版社が違えば、やはり慣習が違う。そういうことが多々あります。

『新潮』、『文學界』、『すばる』、『群像』、『文藝』という五大文芸誌が活躍の基盤となる、いわゆる純文学の領域は、私とは異なる作家活動が繰り広げられています。

エンターテインメント小説という領域は同じでも、ライトノベル、ライト文芸、ウェブ小説など、ジャンルが違えばやはり異なる慣例があります。

そのため、SNSなどで特定ジャンルの作家が「小説家とは〜」や「出版業界は〜」などと大きな主語で自分が身を置くジャンル限定の話をしてしまうと、「いやいや、そうじゃないから」と同業者から指摘が入り、ときどき炎上みたいなきっかけが起ってしまうわけです。

この本に書くことは、ある程度「小説家デビューした方全般」に向けての話となるよう

に努めますが、「一般文芸」の「エンタメ」の領域が話の主軸しゅじくになっていると、ご承知おきください。

この本に書いてある通りのことを実践じっせんして上手くいく人もいれば、いけない人もいますでしょう。この本では「やめた方がいい」と書いてあったことをあえて実行したら大成功して売れっ子作家になった、という可能性もゼロではありません。

そもそも小説を書くこと自体がそういう側面が大きいものだと思います。先人達しこうが試行錯誤さくごしながら築いてきた「面白い小説を書きたいなら、〇〇はやめた方がいい」という創作論は存在しても、それをすべて実践したって確実に面白い小説が書けるとは限らない。真逆けんぎゃくのことをした傑作けつさくだって存在するのです（作家デビューをした方なら、このあたりのことはずすでに実感していると思います）。

あくまでこの本は、右も左もわからないまま出版業界に飛び込んだ新人作家にたいし、とりあえず「お箸はしを持つのが右手で、お茶碗ちawanを持つのが左手です」と教えているようなものです。「左利きだったら逆になるやんけ！」という話ですよね。それくらいのもものとして読んでいただけたらと思います。

右に行くのか左に行くのか、はたまたそれ以外のルートを選択するのは、あなた次第

です。じっくり考えてください。

皆様の明るく楽しい小説家ライフを願っています。今後、出版業界のどこかでお会いできたら嬉しいです。

目次

まえがき 小説家デビューした直後のあなたへ 3

第1章 小説家デビューが決まったら 13

第2章 知っておこう！ 出版業界の仕組み 59

第3章 デビュー後の仕事術 97

特別編

最低限やってもいいかもしれない交友の広げ方

135

第4章

編集者との付き合い方

149

第5章

小説家とお金の話

211

第6章

フリーランスとしての小説家

229

あとがき それでも出版業界は楽しいです

251



第1章

小説家デビューが決まったら

小説家にとっての「デビュー作」とは？

小説家デビュー決定、おめでとうございます。

新人賞に何度も応募して受賞を掴み取ったという方、軽い気持ちで書いた小説でデビューが舞い込んできたという方、状況・事情はいろいろだと思います。しかし、デビューしてしまえばみんな同じ小説家です。

ちなみに10年前の私は、「やっと掴んだ小説家デビュー」と思っていました。小説を書き始めたのが10歳のときで、新人賞に応募し始めたのが14歳のときだったので、10年以上いわゆるワナビというやつをやっていたことになります。

さて、小説家デビューが決まったら、ともかくにもデビュー作をしっかりと送り出すことに注力しましょう。記念すべき、小説家としてのあなたの1作目です。

ちなみに、日本で1日にどれほどの本が刊行されているか、あなたはご存じでしょうか？  
答えは「1日あたり約180冊」です。年間約6万5000冊もの本が刊行されていると言われています。

もちろん、このすべてが小説というわけではないのですが、これからあなたが飛び込む出版業界がどんな規模感なのか、ぼんやり想像することができましょう。

あなたのデビュー作が発売される日も、他に179冊の本が、要するにライバルが発売されるわけです。次の日にも180冊のライバルが現れるのです。

だからこそ、デビュー作というのは、小説家にとって本当に重要なものです。デビュー作がどれくらい面白いか、どれだけ多くの人に読まれるか、業界関係者の目に留まるかで、その後の作家生活が大きく変わってきます。

そんな大事な大事なデビュー作に、小説家は何をすべきなのか？

「SNSで宣伝を頑張る？」

「完成したらテレビ局や新聞社に送ってみる？」

確かにそれも方法の一つかもしれませんが、一番大事なことを見失わないようにしてください。

「大事なデビュー作」に何ができるか？

小説家デビューした自分、そして自分のデビュー作のために、何ができるのか？

真っ先に言えるのは、少しでもデビュー作のクオリティを高めるということです。

デビューの経緯けいや出版社によって刊行までの進行は大きく変わりますが、まずあなたに

は担当編集者がつくはずです。いわゆる〈担当〉です。

小説家と担当編集者は二人三脚で本作りをしていくものです。まずは自分の担当編集としっかりコミュニケーションを取れるようになってください。友達のように仲良くなる必要はありません。言いたいことをちゃんと伝える、聞きたいことをちゃんと聞ける。そういう関係をしっかりと築けるように努めましょう。

ちなみにこれは、作家↓編集者だけでなく、編集者↓作家の関係性においても同じです。「作家である自分ばかりが言いたいことを言える（編集者は何も言えない）」なんて状態はよろしくありません。その点も気遣いながら、担当編集との関係を作っていただく。

編集者との付き合い方は、小説家にとつてとても大事なものです（あまりに大事すぎるので、第4章でがつつりページを割いて解説します）。

もちろん人対人のやり取りですから、馬が合う合わないもあるでしょう。しかし、デビューした以上、小説を書いて本を作ることはあなたにとつて立派な〈仕事〉となります。会社の同僚や上司、取引先の担当者とコミュニケーションを取るように、編集者とだつてコミュニケーションがしっかり取れなければ、残念ながら仕事になりません。

小説家はコミュニケーション能力がなくてもやっていける仕事だというイメージをもし

持っているようなら、さっさと捨て去りましょう。

小説家といたら、家に引きこもって原稿と向かい合っている超インドアな職業と思っ  
てしまいがちです。小説家を目指す人の中には「自分は一般的な会社員なんてとてもでき  
ると思えないから、だから小説家になりたい」と考える人もいるかもしれません。そうい  
えば私も、小説家になりたいと思いい始めた小学生の頃、そんな幻想と期待を抱いていま  
しました。

しかし、今では「小説家はコミュニケーション能力がないと仕事にならないな」と思う  
ようになりました。

この場合のコミュニケーション能力とは、ものすごく弁が立つとか、議論の最中に相手  
を論破するのが上手いとか、友達がたくさんいるとか、そういう類のものではありません。  
自分の考えを相手に伝える。相手の考えを酌み取る。ぎこちなくてもいいからきちんと対  
話をする。そういう超基本的な部分の話です。

人と対話することを恐れず、不必要に忌避したり好戦的になったりせず、担当編集との  
スムーズなコミュニケーションを心がけましょう。

## 改稿は編集者とのコミュニケーションから始まる

デビューが決まっているわけですから、あなたの手元にはすでに本にできるだけの原稿があります。新人賞で賞をもらった原稿だったり、小説投稿サイトで高評価を受けた原稿だったりするでしょう。

しかし、場合によってはその原稿を「改稿」する必要があります。よりいい形で本にするためのブラッシュアップですね。

どのように改稿するか、編集者と打ち合わせすることになるでしょう。編集者も「より面白くなるように」と考えて改稿の提案をしてくるはずですよ。

しかし、実際に手を動かすのは作者自身。「それは違うな……」と思うことがあったら、しっかりと「違うと思うんですけど」と言いましょ。その上で、編集者の考えを聞いてみてください。あなたは「違う」と思った意見でも、相手には相手の理屈りくつや事情があるはずです。検討したり譲歩じょうほしたりしながら、原稿をブラッシュアップしていくのです。

小説家が最初に編集者に送った原稿を「初稿しよごう」といい、一度改稿したものを「第二稿」や「再稿」と呼び、改稿の数が增えるごとに「三稿」「四稿」と名前が変わっていきます。改稿に限らず、編集者とのやり取りは基本的にこれの繰り返しです。意見を出し合って、

相手の考えを聞いて、こちらの考えを伝えて、着地点を探す。でも編集者は原稿を直接直すことはできません。あくまで作者に「提案する」だけです。作者は「拒絶」することのできるのです。

作家に決定権があるからこそ、独りよがりな仕事をしようと思えばできてしまいます。だからこそ、私は編集者との話し合いがとても大事だなと思います。

**本ができるまでの工程をざっくり知っておこう**

そんな改稿作業が無事終わると、いよいよ本格的な「本作り」が始まっていきます。まずはざっくりとした本作りの工程と、よく登場するワードを把握しておきましょう。

## 本作りのざっくりとした工程

### ① 脱稿

著者が原稿を書き終えること。この原稿を担当編集が確認し、OKを出すことで「本作り」がスタートする。

本作りが始まってでも原稿の修正はできるが、脱稿の段階までに行ける限りの修正を済ませておく必要がある。これ以降の工程で発生する修正は最低限のものにしたい。

## ② 入稿 にゅうこう

脱稿した原稿を編集者が精査したのち、印刷所に渡す。発売日の半年〜3ヶ月前くらいを目安に行う。

## ③ 組版 くみはん

印刷会社が本の形に原稿をレイアウトすること。会社によっては、この作業を編集者が行っている場合もある。

レイアウトされた状態のものを「校正紙」や「ゲラ」と呼ぶ。ゲラの方がよく使われる。

## ④ 初校出し しよこう

印刷会社から送られてくる最初のゲラを「初校」という。これを著者・編集者がチェックする。入稿前の原稿を指す「初稿」と音は同じでも意味が違う。

### ⑤ 校閲者のチエックこうえつしや

校閲者（校正者）⇨原稿の誤字脱字ごじだつじや事実関係をチエックする専門の人々。誤字脱字と見られる箇所かしょや、事実と異なると思われる箇所などをエンピツで「〇〇では？」と指摘してくれる。あくまで「指摘」なので、採用するかしないかは著者が決める。

### ⑥ 編集者のチエック

著者に初校ゲラを渡す前に、編集者が確認する。本来なら改稿の段階で済ませておくべきことだが、この時点で修正のポイントが見つかってしまった場合、「〇〇とした方がわかりやすいのでは？」という具合にエンピツで書き込んで著者に判断を委ねる。

### ⑦ 著者校正

校正⇨原稿をチエックし、修正が必要な箇所に指示を入れること。ゲラに赤ペンで修正指示を記入していくのだが、この修正指示を「赤字」、修正を記入する行為を「赤入れ」などと言う。

赤ペンは印刷会社に対して「このように直して」という指示。編集者や校閲者がエンピツで書き込むのは基本的には「〇〇してみても？」という提案なので、著者が自分で判断する必要がある。ただし明らかな誤字脱字は編集者が赤ペンで訂正する場合もある。

### ⑧ 初校戻し

初校ゲラを著者↓編集者↓印刷会社へと戻していくこと。ゲラに記入された赤字に沿って、印刷会社で修正される。

### ⑨ 再校さいこう

印刷所から送られてくる二度目のゲラ。初校の修正が反映されている。これを再び校閲者、編集者、著者がチェックする。

基本的にこの再校の校正指示を反映し、すべての修正は終わらせるものとされている。なので、著者にとってはこれが最終確認になることが多い（のだが、なかなかそんなスムーズに進まないことも……）。

どうしても修正が終わらなかった場合、三校、四校とやり取りが続いてしまう。できるだけ

数は少なく済ませたい。何故なら、回数が増えるたびにお金がかかるから。そしてゲラの段階でアレコレと手を入れるのは、誤植などの重大な事故の原因になる。

### ⑩ 念校 ねんこう

修正がほとんど終わり、念のために行う校正用のゲラ。出さない場合もあるし、出しても編集者がチェックするだけで著者には見せない場合もある。

念のためチェックするものなので、修正は念校前までにしっかり終わらせよう。

### ⑪ 色校 いろこう

色校正の略。本のカバーや帯などの試し刷りをし、色味をチェックすること、またその試し刷りそのものこと。編集者やデザイナー、イラストレーターがチェックするだけで、著者には見せない場合が多い。

### ⑫ 校了 こうりょう

印刷してもいい状態になること。ここまできたらもう絶対に手は出せない。編集者に対し「確

認できませんでした。こちらで校了してください」とか、編集者が著者に対し「確認ありがとうございます。ございました。こちらで校了とします」などと使うことが多い。

似たような言葉で「責了」というものもある。これは「責任校了」の略で、編集者や印刷所の責任で修正を確認し、校了すること。微細な修正が入ったときに使われる。

### ⑬ 刷了さつりょう

印刷が終わること。校了し刷了の間にも製版、白焼き出し、白焼き戻り、下版、印刷などの工程があるが、作家が使うことはあまりないかもしれない。

### ⑭ 製本せいほん

刷了した印刷物を一つに綴じて、本の形にすること。

### ⑮ 取次搬入とりつぎはんにゆう

本が出版社の倉庫から取次に搬入されること。本は出版社から書店に届けられるのではなく、取次を介して書店に送られる。

取次とは出版社と書店の間で本を行ったり来たりさせる流通業者のこと。

## ⑯ 発売日

「本が店頭に並び始める日」とされる日。どうしてこんなややこしい書き方をするかというと、本は出版社↓取次↓書店という具合に届けられ、しかも都心部から地方へと順次送られていく。本が届いたところから書店が店頭に並べていくので、発売日にはタイムラグが生じてしまう。

そのため、出版社は⑮取次搬入の日の数日後を発売日としてアナウンスすることが多く、場所によっては発売日より早く本が店頭に並ぶこともある（フラゲ日と呼ばれるのがこのケース）。

また、Amazon や楽天ブックスのような通販サイトも独自に発売日を設定しており、それが出版社が告知している発売日と異なる場合もある。

とりあえず、出版社が告知している発売日を「発売日」として認識しておけばいい。

これがかかりざつくりとした本作りのプロセスです（もっと詳しい解説は別の章で）。デビュー作の刊行までは、ひとまずここに書いた工程を頭に入れておけば充分だと思えます。

かなりの数の工程がありますが、作者ががつり作業するのは基本的に「初校」と「再校」の二度の校正のみです。この間に修正すべきことはすべてしつかり赤入れしておきましょう。

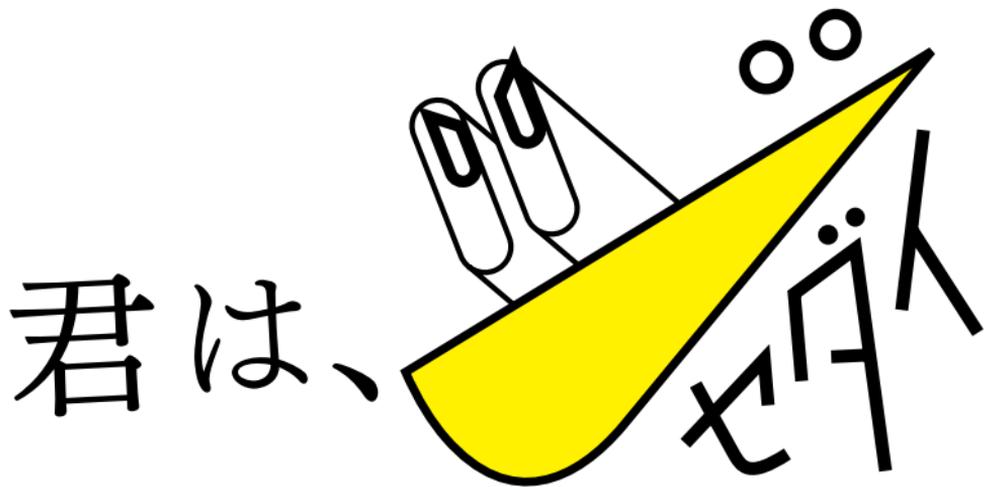
担当編集との打ち合わせで、これらの工程がどんなスケジュールで進んでいくかを確認しておくといいです。

「発売日が6月下旬なので、校了は5月中旬、初校ゲラは3月に出したいので、2月の頭には入稿したいです。となると、改稿の<sup>しめきり</sup>メ切は1月末ですね」

という具合に、逆算してスケジュールを決めることができますし、その後の担当編集とのやり取りもスムーズになります。

**まだまだある！ デビュー前にとりあえず押さえておきたい出版業界用語**

いろいろ列挙していますが、デビュー前にすべて覚える必要はありません。仕事をしながらちよつとずつ覚えていけばいいと思います。



君は、

ジセダイ

何と闘うか？

<https://ji-sedai.jp>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

**メインコンテンツ**  
**ジセダイイベント**

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

**ジセダイ総研**

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

**星海社新書試し読み**

既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

**行動せよ!!!**